

泉田青年本部長さん インタビュー

教団は12月1日から新年次を迎えました。泉田和士郎・青年本部長さんに、この一年の振り返りと、青年部員へのメッセージをいただきました。



「つながり」を大切に 自分づくり

——まずこの一年を振り返ってお感じになられることをお話しください。

この一年、私はことあるごとに、

青年のみなさんに「つながり」を大切にしてほしいと強調してお伝えさせていただきました。大事にしたいのは、私たち一人ひとりが仏さまとつながっている実感です。仏さまが私たちとつながってくださっている、と言ったほうが適切かもしれません。

せん。姿は見えませんが、現象としてつながってくださっている仏さまの存在を意識し、その上で、今度のだれと、どのようにつながっていくか——それを大切にして、私自身、この一年を過ごしてきました。みなさんにもぜひ、人と人との出会い、

日々の出来事のなかに仏さまとつながっている自分を感じていただきたい、そう願っています。

青年部活動のなかでの具体的な「つながり」の実感とは、手どりだと思うのです。「手どられる側」から「手どる側」になってほしい。それが私の願いでもあります。一回でもいいから手どりに歩いて、思いやりを持って相手に接していく。そうした実践をしていただきたいと願っています。仏さまとのつながりを感じながら、だれかとつながっていく、この両方が感じられてこそ本当の「つながり」といえるのではないのでしょうか。

——泉田本部長さんご自身もこの一年、全国各教会を訪れ、青年たちと交流されています。そのなかで感じになったことをお分けください。「教会でいろいろな青年さんと同じか

にふれあうって有り難いな」。それが率直な気持ちです。

昨年、青年幹部会で「三年かけて全国の青年部のみなさんに会いに行きます」と宣言しました。ざっと計算しただけでも三日に一度はどこかの教会を訪問することになり、「大変なことを言ってしまったな」といまさらながら思っています（笑）。それでも今年は二十四教会を訪れ、青年のみなさんと交流させていただきました。

そもそもこうした宣言をした背景には、「つながり」というテーマを打ち出した青年本部の本部長として、私自身が青年部員さんどうつながっていくか、私自身が青年さんとのつながりのなかで、どう仏さまとつながっていくか、を自分に問うたことがきっかけでした。これまでは支教会、あるいは教区の大会などでお話をさせ

ていただくことはあっても、なかなか一教会の青年部のみなさんのなかに入り込んでいくことはできませんでした。また、青年幹部会などで幹部の方とは顔見知りになっても、一般の青年部員さんや青年婦人部員さ



ん、学生部員さん、少年部員さんにはなかなかお会いする機会がありませんでした。ですから、青年部員さんの集まる場所ならどんな場でもいい、小規模でもいいから足を運んでじかにふれあいたいと思ったのです。

たとえば川内教会では、少年部員さんが中心となつて教会をあげて「焼酎」に使うさつまいも作りに取り組んでいます。今回、私はその収穫に参加させていただきました。大きなさつまいもがたくさん採れ、感謝の気持ちで植えた野菜はこんなにも豊かに育つのだと少年部のみなさんと実感しました。

また、寺泊教会では、青年部の法座に少年部の子どもたちも参加し、いろいろな質問を受けました。「団参つてなんですか」「本部長さんは別荘を持っていますか」など、子どもならではの素朴な質問に心が和み

ました。また、ある教会を訪問した際は、中学生の男の子が駅まで迎えに来てくれました。自ら誓願して出迎えてくださったことを知り、嬉しく、有り難く思いました。彼自身、最初は緊張の面持ちでしたが、教会に向かう道中にいろいろとお話させていただき、教会に着くころにはお互いに心が打ち解けたような気がしました。いつか少年部員さんに「本部長さんに会いたい！」と駅まで迎えに来てもらえる日が来ると嬉しいです。

全国では、日々みなさん方がいろいろと活動をされていますが、そうしたみなさんのお姿とじかに接することができ、大変有り難い機会をいただきました。来年も四十ほどの教会訪問が予定されています。どんな交流が待っていて、みなさんのどんな思いにふられるのかを楽しみにしています。

「いちじき」
「一食を捧げる運動」の
原点を知り取り組む

——「一食を捧げる運動」も、昨年同様、取り組みに力を入れていきます。

校成会のことを知らない人に「立正佼成会って何しているの」と聞かれたとき、私は「一食を捧げる運動」についてお伝えしています。すると「それは分かりやすい」と理解してくださいます。一食を捧げて平和のために献金する。それは、だれにでも理解していただける行動だと思います。そして、仏さまの願いが一番分かりやすく示され、私たちが胸を張って広めていける実践行だと思えます。

一宗教団体が平和活動に取り組むということとは本来、とても難しいことです。立正佼成会が世界的視野でさまざまな平和活動を展開できるそ



の原点は、「一食を捧げる運動」です。そして、この運動が始まったのは、一九七三年に就航された第一回「青年の船」でフィリピンを訪れた

際、荒れ果てていた日本人墓地を新たに建設しようと、青年たちが立ちあげた「モンテンルパ慰霊基金」がきっかけでした。しかし募金活動を行なうなか、第二次大戦中に、

日本がフィリピンに対して行った数々の残虐な行為を知り、先輩方は、心から懺悔し、日比両国の平和のためには、友好、お互いを信じる愛が大切であることを学び、フレンドシップタワーを建てました。(『マンガ はじめの一步物語』P30に詳細)。それが、二〇一五年に四十周年を迎えます。「一食を捧げる運動」が青年によって始まったという原点をしっかりと学び、その精神を理解して、あらためて私たち青年の活動の柱として積極的に取り組んでまいりたいと思います。

当たり前前 の当たり前

——新年次をふまえ、全国の青年部にメッセージをお願いします。

青年本部では、「日本常寂光土宣言」「世界通一仏土宣言」を二大ビジョンとして掲げています。なかなか難しいことのように思われるかもしれませんが、要は、私たち一人ひとりが仏さまの心をしっかりと自分ものにしていくということです。人間が人間として当たり前前のことをする、それは優しさや思いやり、わかちあいの心を發揮していくことです。一人ひとりがよくなっています。その人間の集団は当然よくなります。一歩でも、半歩でもよくなります。一歩でも、半歩でもよくなります。一歩でも、半歩でもよくなります。一歩でも、半歩でもよくなります。お互いさま、明るく、優しく、温かい自分づくりに今年次も本気で取り組んでまいりましょう。